

哲学研究

第五百七十二号

『シスター・キャリア』と初期シカゴ学派

井上 俊

一 ジャーナリズムの世界

一九二〇年代から三〇年代前半にかけて、全盛期のシカゴ学派都市社会学を率いていたロバート・E・パークは、常々学生や院生に対して、社会学の文献だけでなく、シオドア・ドライサーやシンクレア・ルイスなども読むように勧めていたという (Lindner, 1996: 195)。

ドライサーの処女長編『シスター・キャリア』は一九〇〇年に出版されたが、版元のダブルデイIIページ社が不熱心だったこともあって、ほとんど評判になることもなく、売れ行きもきわめて悪かった。しかし一九〇七年にドッジ社から再刊されると、今度はそう悪くない評判と売れ行きを示した。そして一九一一年、ドライサーの第二作『ジェニー・ゲルハート』が出版されて批評家からも好評を博すと、それにつれて『シスター・キャリア』の評判も高まり、パークがシカゴ大学で講義をはじめた一九一三年頃には、すでにアメリカ自然主義文学の重要な作品としての評価が形成されつつあった (Mitchell, 1998: xv)。さらに一九二〇年代に入ると、シンクレア・ルイスの『メイン・ストリート』(一

九二〇)や『バビット』(一九二二)、ドライサーの『アメリカの悲劇』(一九二五)なども出版され、いずれもベストセラーとなって広く読まれた。

一九〇三年にドイツ留学から帰って、シカゴ大学で教職につくまでの間、パークはコンゴ改革協会(Congo Reform Association)の活動にかかわり、さらに当時の代表的な黒人指導者で黒人教育事業の推進者、ブッカー・T・ワシントンの秘書兼協力者(兼ゴーストライター)のような仕事をしていたが、もともとはジャーナリスト出身である。一八八七年にミシガン大学を卒業したあと、まずミネアポリスに出て、ここの『ジャーナル』紙の記者となる。三年ほど勤めたあと、「野心的な新聞記者のメッカ」であるニューヨークをめざし、デトロイトやデンヴァーの新聞社を経て、一八九二年にはニューヨークの大衆紙『モーニング・ジャーナル』の記者となって警察関係を担当し、同時にピュリッツァーの経営する大衆紙『ワールド』の日曜版などにも寄稿するようになる。のちにふれるように、一八九四年、ニューヨークに出てきたばかりの若きドライサーが記者として雇われることになったのも、この『ワールド』紙である。

「野心的な新聞記者」らしく、パークも、マンハッタンを背景に新聞記者を主人公とした小説を書き、ほかに戯曲なども試みたが、成功しなかった。そして、ニューヨークのようなところでは活躍できる記者生命がきわめて短いことを悟り、別の道への転身も考えて、ドライサーとはぼ入れ違いにこの都市を去るが、その後もデトロイトやシカゴで記者稼業を続け、一八九七年にハーバードの大学院に入るまで、パークの記者生活は結局十一年に及んだ(Mathews, 1977: 8-30; Raushenbush, 1979: 15-28)。

このジャーナリズムの世界での経験、とりわけ、都市のさまざまな側面を記者として取材した経験が、都市の多面性と活力に対するパークの認識を深め、また「社会有機体としての都市」といった考えを育てることによって、のちのシカゴ学派都市社会学の展開に重要な意味をもったということについては、よく知られているところである。この観点をさらに拡張して、ロルフ・リンドナーは、世紀転換期のアメリカにおける新聞・雑誌ジャーナリズムと初期シカゴ学派

との密接なつながりを強調した(本節の以下の記述は大筋において Lindner, 1996 に従う)。

リンドナーによれば、一九二〇年代から三〇年代にかけてのシカゴ学派都市社会学が扱った対象のほとんどは、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのジャーナリズムの世界で、有能なジャーナリストによってすでに扱われている。このことを詳細に跡づけながら、リンドナーは、たとえばジェイコブ・リースによるスラムのリポート『貧乏人の暮らし』(一九〇)、ジョサイア・フリント「ウィラード」の『浮浪者とともに』(一九一九)、ハッチンズ・ハブグットの『ゲットーの精神』(一九〇二)や『ある泥棒の自伝』(一九〇三)、リンカン・ステファンズの『都市の恥辱』(一九〇四)などを代表的な例としてあげている。これらの多くは書き下ろしではなく、新聞や雑誌の連載記事などをあとで本にまとめたものである。普通の人びとには目の届かない、大都市の影の部分に踏み込んだルポルタージュは、当時のジャーナリズムの呼び物の一つであり、多くのすぐれたジャーナリストがこの領域にかかわっていた。

さらにリンドナーは、扱う対象だけでなく、その扱い方や調査のテクニクなどにおいても、シカゴ学派都市社会学はジャーナリズムが開発した方法を受け継いでいるという。当時活躍した現場のジャーナリストの多くは、いわゆる「サツまわり」の記者 (police reporter) であった。彼らは、犯罪、喧嘩、火災、事故、自殺、売春など、あらゆる市井の事件を扱う。記者時代のパークも、ニューヨークでは、イーストサイドのマルベリー街を担当するポリス・リポーターだった。ここはスラムを控えた事件の多い地区で、一九九〇年代のはじめ頃は、前記のリースやステファンズ、それに一九九三年に『街の女マギー』を自費出版するステイヴン・クレインなど、錚々たる面々が取材と報道に鎬を削っていた。のちにパークは、「とにかく現場へ行け」「その雰囲気をつかめ」「人びとと知り合いになれ」という指示をくりかえし学生たちに与えたというが、それはおそらく、記者時代に身に沁みついた実践的な教訓だったにちがいない。

のちに「身元を秘した参与観察」(concealed participant observation) などと呼ばれることになるテクニクも、も

ともとジャーナリズムの世界でロール・リポーターイング (role reporting) と呼ばれていたものであり、一八九〇年代にはすでに盛んに用いられていた。その代表格は、ネリー・ブライという筆名で知られた女性記者、エリザベス・コ克蘭である。彼女は、ニューヨーク『ワールド』の記者として、ジュール・ベルヌの『八十日間世界一周』に挑戦、七十二日六時間十一分で旅を終えて一躍有名になったが、記者としての彼女の本領はむしろ、それらしい役を演じてさまざまなところに潜入するロール・リポーターとしての仕事にあった。ピッツバーグの『ディスパッチ』紙を経て一八八七年にニューヨークに出てきたコ克蘭は、世界一周のほかにも、たとえば被害妄想病患者を装って悪名高い精神病院に入院してその内情を記事にしたり、犯罪者を装って女子刑務所に潜入したり、貧しい病人のふりをして困窮者用の病院の実態を報告したりと、多彩な活躍をした。女子刑務所の場合もそうであるが、彼女はしばしば女性でなければできない役を演じ、デパートの売り子(ずっとのちにフランシス・ドノヴァンが取り上げる「セールスレディ」)や住み込みのメイドなどの生活や労働条件についても、実際に経験したうえでヴィヴィッドなルポルターージュを書いている。

二十世紀に入ると、「大都市の生活に対するジャーナリズムの関心は政治的な性格を帯び、ヘマックレイキングの形をとった」(Linder, 1996: 24)。マックレイキング (muckraking) というのは、政治や経済にかかわる腐敗や不正、スキャンダルなどを「事実に基づいて」明らかにしていく批判的・暴露的なジャーナリズム活動をいう。その主要な舞台となったのは、「十セント雑誌」と呼ばれた新しい大衆雑誌、つまり従来の『アトランティック』『センチュリー』『スクリブナーズ』など、どちらかといえばハイブローな雑誌に対抗して生まれてきた『マクルアーズ』『ゴズモポリタン』『エヴリボディーズ』などの大衆雑誌であった。そして、このマックレイキング・ジャーナリズムによって、一見もっともらしい見せかけの背後に隠された暗部、たとえば警察や司法関係者の腐敗、大企業の無法、誰も疑わない大掛りな闇取引などが次々と暴かれていく。「スタンダード石油社の歴史」を『マクルアーズ』に連載したあと二巻本として出版した女性ジャーナリスト、アイダ・ターベル、同じく『マクルアーズ』に職業的犯罪者たちへのインタビューに

基づいて「不正利得の世界」を書いたJ・フリント「ウィラード」、ニューヨークやシカゴをはじめ、セントルイス、ピッツバーグ、フィラデルフィアなど、大都市の政治腐敗を「都市の恥辱」として暴いたL・ステファンズらがこの時期の代表的なマックレイカーとみなされている (Tarbell, 1904; Steffens, 1904)。なお、コンゴ改革協会時代のパークも、『エヴリボディーズ』に、「ビジネスする王様」(一九〇六年十一月号)、「コンゴをめぐる恐ろしい話」(同年十二月号)、「コンゴの血まみれの金」(一九〇七年一月号)など、ベルギーのレオポルド二世のコンゴ支配を告発するマックレイカー型のエッセイを書いている (Lymann, 1998: 13-23)。

リンドナーによると、世紀転換期のアメリカ・ジャーナリズムの世界でボリス・リポーターやロール・リポーター、あるいはマックレイカーたちによって開発された方法やテクニクがシカゴ学派都市社会学においても引き継がれ活用されているのだが、これまでの社会学史などでは、この点はあまり指摘されず、むしろ人類学の方法を採り入れたというのが定説となってきた。よく知られているように、パーク自身も、アーネスト・W・バージェスとの共著『都市』(一九二五)の冒頭に置かれた論文のなかで、人類学が未開社会の研究に用いてきた「辛抱強い観察法」をシカゴのリトル・イタリーやニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジなどの研究に適用することによって多大の成果を挙げうる、という意味のことを述べている (Park & Burgess, 1984: 3)。この「都市——都市環境における人間行動の調査のための提言」というパークの論文は、もともと一九一五年に『アメリカ社会学雑誌』に発表されたものであるが、人類学にふれた箇所は初出時にはなく、『都市』への収録に当たって書き加えられた文章である。そして『都市』が出版された一九二五年といえ、すでにマリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者たち』(一九二二)やラドクリフ・ブラウンの『アンダマン諸島民』(一九二二)なども出版され、人類学の参与観察法の評価が高まりつつあった時期である。このような事情を考えると、パークの発言は「一種の正当化」であり、実際には世紀転換期のジャーナリズムの世界、とくにそこで盛んであった「都市ルポルタージュ」の流れからの影響が大きかったとリンドナーは結論している。

もちろん、リンドナーの意図はシカゴ学派を貶価することにあるのではない。これまでよりもいくぶん広い文化的背景のもとにシカゴ学派を置いてみる、というのが彼のポイントであろう。ただし彼はジャーナリズムに焦点を絞ったので、パークが学生たちに勧めたというドライサーやルイスの文学についてはほとんど議論していない。『シスター・キヤリー』も『メイン・ストリート』も、ほんのついでに言及するといった程度の扱である。しかし、リンドナー自身も述べているように、当時のジャーナリズムとドライサーやルイスを含むアメリカ自然主義文学の発展とは密接に関連していた。また、たとえばホーボーのような現象は、ジャーナリストだけでなく、ジャック・ロンドンやW・H・デイヴィスらの文学者によっても好んで取り上げられたテーマであった (London, 1907; Davies, 1908; Feied, 1964)。ネルス・アンダソンの『ホーボー』(一九二三)も、最初は「ホボヘミア」というタイトルでの出版が考えられていたのだが、シンクレア・ルイスに同名の短編小説(一九一七)があるため、「ホーボー」という題名に落ち着いたという。このように考えるなら、ジャーナリズムの世界からさらに視野を広げて、ジャーナリズムを含む広い意味での文学あるいは文芸に目を向けることが望ましいと思われる。パーク自身、たとえば小説とジャーナリズムをともに「文学の形式」と考えていたのだから (Park, 1940: 686)。

二 成功と零落の物語

『シスター・キヤリー』はアメリカ自然主義文学の代表的な作品の一つであると同時に、B・H・ゲルファントが論じたように (Gelant, 1954: 49-94)、すぐれた「都市小説」でもある。そこにはドライサーのジャーナリストとしての経験が反映されている。パークと同じく、ドライサーもジャーナリストとして出発し、作家として生活が安定するまで、新聞記者、雑誌編集者として長らくジャーナリズムの世界にかかわっていた。一八九二年にシカゴの『デイリー・グローブ』の記者となったのを皮切りに、セントルイスの『グローブ・デモクラット』や『リパブリック』に勤め、さらに

トレド、クリーヴランド、ピッツバーグなどの新聞社を転々としながら、一八九四年十一月、ニューヨークに辿り着き、ピュリッツァーの『ワールド』の記者となる。その頃、ドライサーよりも七歳ほど年長で、五年ほど早くジャーナリズムの世界に入っていたパークは、すでにふれたように、ほぼ入れ違いにニューヨークを去っていた。

記者時代に、大都市のここかしこを歩き回り、明暗さまざまな出来事を取材し、多くの都市ルポルターージュを書いたドライサーの初めての長編小説『シスター・キャリア』がすぐれた「都市小説」となったのは、当然のことかもしれない。たとえば、この小説の後半、第四十章から四十一章にかけて、「ブルックリンの路面電車のストライキ」を扱った有名な部分がある。従業員のストライキに対して会社側は失業者を雇い、速成で運転の基本を教えて、電車を動かす。このストライキは、一八九五年一月に実際に起こり、約一ヵ月間続いた。村山淳彦の訳注によると、「ストライキの描写には、ドライサーが当時記者をしていた『ワールド』などの新聞記事が利用されている。また、一八九四年三月にオハイオ州トレドで起きた市電のストライキについて、ドライサーが、アーサー・ヘンリーの経営する新聞『トレド・ブレイド』の記者として書いた記事も一部……組み込まれている」。また第四十五章の、ホームレスたちを一行に並べてその夜の宿泊代を街頭で募金する情景の描写にも、ドライサーが一八九九年に『デモレスツ・マガジン』という雑誌に発表した記事が利用されているという（ドライサー、一九九七「下」、四七三、四七七頁）。

最近のシグネット・クラシック版に「序文」を寄せたR・リンジマンも、『シスター・キャリア』は物語の展開と都市の描写とが密接に絡み合っている作品で、「都市生活というものの実相を生き生きと描き出した最初の小説の一つ」であると述べている（Lingeman, 2000 : xiv）。

物語は、中西部の田舎町に生まれ育った十八歳の娘が、「謎にみちた都会の偵察に乗り出しつつ、はるかな高みへかけ上るといふ、何かはつきりしないながらとてつもない夢を抱いて」シカゴに出てくるところからはじまる。

キャロライン・ミーバーは、シカゴ行き午後の列車に乗り込んだ。そのとき手に持っていたものといえは、小さなトランクが一つ、人造ワニ革製の安物の手提げ鞆、紙袋に入れた小さな弁当、黄色い革製のがま口、そのなかに入れた切符、ヴァン・ビューレン通りに住む姉の住所が書いてある紙片、それにおかねが四ドル、それだけだった。時は一八八九年八月のこと。年齢は十八歳。頭はよいが、内気で、無知と若さゆえの幻想をいっぱい抱えていた(ドライサー、一九九七「上」、一三頁)。

一八八九年のシカゴは、前代未聞の成長を遂げている真っ最中で、若い娘たちさえもこのように胸躍る旅に出てやってくるのは、無理もないと思えるような都市だった。稼ぎにありつける可能性にあふれていて、まだまだ発展中だという噂は遠くにまで広がっており、そのために、あらゆる場所から希望にみちた人びとや希望を失った人びとを引きつける巨大な磁石になっていた——これから運だめしをしてみなければならぬ人びとも、すでにどこかで運がつきてみじめな結末を見てしまった人びともやってきた(ドライサー、一九九七「上」、三六一三七頁)。

当時のシカゴについてドライサーは「人口五十万を超える都市」と書いているが、これは不正確で、一八八九年当時のシカゴはすでに百万都市であり、ニューヨークに次ぐアメリカ第二の大都市になっていた。そのシカゴに出てきたキャロライン(キャリー)は、姉の家に寄宿しながら仕事を探して歩きまわるが、なかなかうまくいかない。ようやくみつけた靴の型抜きの仕事も、きつい流れ作業であるうえに週給四ドル五十セントの安賃金。姉に食費の四ドルを渡すと、手許には五〇セントしか残らない。三週間ほど働くが、熱を出して仕事を休み、そのまま失職してしまふ。そんなとき、シカゴへ来る汽車のなかで知り合った遊び人のセールスマン、ドルーエと再会し、たちまち誘惑されて同棲することになる。

さらにキャリアーは、ドルーエの友人ハーストウッドに紹介され、この中年の「上品な紳士」に心惹かれる。ハーストウッドは、シカゴの名士たちが集まる有名なバーの支配人で、彼自身「とても成功した名士」とみなされており、「いかにもそれらしい人物」にみえる。

四十歳にもうすぐ手が届く年齢に加えて、均整がとれて恰幅かっぴくのよい体格で、ものおじしない態度、堅実で安定した雰囲気はただよわせている。その雰囲気はある程度、立派な服や清潔なシャツや貴金属を身につけているせいでも、かもしだされたものでもあるが、何よりもまず有力者としての自信の賜物たまものだった（ドライサー、一九九七「上」、八六頁）。

ハーストウッドには妻と息子と娘がいて、表面的には平穩に暮らしているが、その家庭生活は決して幸福なものとはいえない。そのこともあって、ハーストウッドもまたキャリアーに惹かれる。そして、ある夜、ハーストウッドの店の出納係が金庫の鍵をかけ忘れるという出来事があり、ハーストウッドは迷いながらも金庫の金を持ち出し、ドルーエが怪我をしたと嘘をついてキャリアーを連れ出し、そのまま駆け落ちしてしまう。二人はモントリオールを経てニューヨークに落ち着き、ハーストウッドは再びバーの経営にかかわって一旗あげようとするがうまくいかず、しだいに零落していく。シカゴでは「名士」とされていたハーストウッドだが、「ニューヨークのような大海では、とるにたらぬ一滴の水にすぎない」。

ハーストウッドがバーの経営に失敗し、蓄えも底をついてきたため、キャリアーはカジノ座のコーラスガールの仕事をみつつけ、週給十二ドルで働きはじめるが、これがきつかけとなって、女優として芽が出てくる。一年も経たないうちに給料も三十五ドルとなり、失職して家でぶらぶらしているだけのハーストウッドを捨て、コーラスガール仲間の友人ロ

ーラと二人で部屋を借りることにする。

出ていくことに決めたその夜に目にしたハーストウッドは、甲斐性かいじやうのない意気地なしというよりも、運に見放されて打ちのめされているだけのように見えた。目には鋭さがなく、顔にはしみが浮き、手は弱よわしい。髪にはちよつと白いものが見えるような気がする。捨てられようとしていることも知らないで、揺り椅子に座って新聞を読んでいる。その姿をキャリーは盗み見ていた。……結局この人が悪いわけではないのかもしれない。シカゴでは羽振りがよかったのに。キャリーは、公園で逢引きをした日々のハーストウッドの立派な風采を思い出した。あの頃のこの人は、とても陽気で、とても清潔だった。それがこのありさまになったのは、何もかもこの人の罪なのかしら（ドライサー、一九九七「下」、三三三―三三二頁）。

キャリーに捨てられてからハーストウッドはますます落ちぶれ、ついには物乞いで食いつなぐところまで追い込まれる。一方キャリーは、軽演劇の女優として人気を博し、ロンドン公演をも成功裡に終えて、今やニューヨークの高級ホテル、ウォルドルフ・アストリアで暮らす身分になっている。

ブロードウェイの三十九丁目には、白熱灯に照らし出されてキャリーの名前が浮かび上がっていた。その看板には「キャリー・マデンダとカジノ座劇団」と書いてある。この光線を受けて、融けかけた雪の積もっている歩道は、隅ずみまで光っていた。あまりの明るさに、ハーストウッドの目が引かれた。見上げると、金縁の大きな掲示板に、キャリーの等身大のみごとな石版肖像画が貼ってあった。

ハーストウッドは一瞬それを見つめた。鼻水をすすり、あたかも何かにくすぐらわれているかのように片方の肩を

引きつらせた。しかし、あまりにも落ちぶれていたもので、ほんとうは頭がはつきりしていなかった。

ようやくキャリアに話しかけるように言った。「おまえか。おれではもの足りなかったのか、ふん！」（ドライサー、一九九七「下」、四三九頁）。

この数日後、ハーストウッドは、一泊十五セントの安宿の一室でガス自殺をとげる。キャリアの成功とハーストウッドの零落とを対比させながら、ドライサーは、都市をそういう人生の浮沈の場、社会的上昇と下降が交錯する空間として描き出している。この点は、のちに階層間の上昇移動と下降移動を含む「社会移動」(social mobility)の概念として、P・A・ソローキンらによって社会的に洗練されていくことになるが、社会移動の舞台としての都市、成功と零落の物語が交錯し展開する場としての都市という視点は、たとえば『ホーボー』(N・アンダソン、一九二三)や『ゲットー』(L・ワース、一九二八)、『ゴールド・コーストとスラム』(H・ゾーボー、一九二九)、『ジャック・ローラー』(C・ショウ、一九三〇)、『タクシー・ダンスホール』(P・クレッシー、一九三二)など、多くの初期シカゴ学派のモノグラフにおいても、いわば暗黙のピースペクティブとしてほぼ共有されていたといえよう。

三 消費文化の光と影

『シスター・キャリア』はまた、大都市において当時発展しはじめていた「消費文化」の姿を先駆的に、しかも鮮やかにとらえた作品としても評価されている。

たとえば、消費文化の発展に大きな役割を果たしたデパートという装置は「当時、経営が波に乗りはじめた」頃で、「地味な商売という原理からこんな華やかな現象が生じるとは、この当時まで世界に類を見なかったこと」であった（ドライサー、一九九七「上」、四七―四八頁）。シカゴに来て間もなく、求職のためにデパートを訪れたキャリアは、

就職には失敗するが、その華やかさにすっかり心を奪われる。

カウンターそれぞれに、目もくらむほどの品物が、魅力たっぷりに展示されている。装身具や貴金属一つひとつに、どうしようもなく心を奪われたが、立ち止まりはしなかった。ここには、あたしに使えないものは一つもない——欲しいものばかりだ。あの可愛らしい室内履しつぽきやストッキング、優美な装飾りのついたスカートやベチコート、レースにリボンに櫛くしにハンドバッグ。みんなそれぞれ別個の欲望をかき立ててくれるが、どれ一つとして自分に買えるような品ではない。その事実が痛いほどわかった。あたしは仕事を探しにきた人間だ。職もないような除け者だ。並みの従業員だって、あたしを一目見れば、貧乏で、勤め口を探していることがわかるだろう（ドライサー、一九九七「上」、四九頁）。

しばらくして、キャリアはドルエに貰った二十ドルを持って同じデパートに行く。

前にこの店にはじめて入ったときから、そのすばらしさを高く買っていた。前回は急ぎ足で通り過ぎるだけだった美しい品物を、今度は一つひとつじっくりと見て歩いた。それが欲しさに女心が熱くなる。これを着たらどういう具合だろうか。あれを身につければどんなに可愛らしくなることか！ ……決心さえすれば、このなかから一着すぐにでも買えるんだ。宝石売り場でも時間をかけた。イヤリング、プレスレット、襟留えりどめ、ネックレス。こういうものが全部買えたら、何をあげてもいいわ！ こういうものを少しでも身につけることさえできたら、あたしだってすてきに見えるはずよ（ドライサー、一九九七「上」、一三〇—三一頁）。

さらにしばらくすると、ドルーエと同棲したキャリアーは流行の衣服や化粧品を買い替え、実際に「すてきに見える」ようになっていく。

ドルーエはキャリアーをあまり独りぼっちにしておかなかつた。キャリアーが一人でぶらつくこともあったけれど、だいたいはドルーエが観光に引つ張りまわした。カーソン・ピリー洋服店で結構なスカートとブラウスを買ってくれた。ドルーエが出してくれたおかねで化粧品も多少買いそろえ、しまいには別の娘かと見違えるほどになった。鏡をのぞいてみると、ずっと前から思っていたことが確信できた。そうよ、あたしはきれいなんだ、ほんとに！ 帽子もちゃんときまっているし、目もきれいじゃない？ 赤く塗った小さな唇を軽く噛んで、自分の魅力をはじめを確認する興奮を覚えた。ドルーエはなんていい人なんでしょう（ドライサー、一九九七「上」、一四八頁）。

ドライサーはここで、ドルーエの誘惑が実は都市の誘惑であり、消費文化の誘惑であることを的確に描いている。キャリアーがドルーエの誘惑に比較的簡単に屈してしまうのは、ドルーエ自身の魅力によるといふより、むしろドルーエの背後に輝く都市の魅惑、消費文化の魅力によるのである。キャリアーはドルーエを通じて都市的な消費文化に接近し、またその扱い方を学んでいく。それは「富がまとう皮相の姿」についての学習であり、キャリアーは「覚えの早い生徒」であった。

ある品物を見るとすぐに、それをうまくものにできたら自分はどう見えるようになるかと考えはじめ。言うまでもなくこれは、高尚な反応ではないし、分別のあることではない。立派な精神を持っている人たちは、こんなことで心を悩ませはしない。だが反対に、きわめて低級な精神の持ち主も、こんなことで心を動かされはしないのだ。

キャリアにとつてきれいな衣服は、したたかな説得力をそなえていた。衣服は甘い言葉で、またイエズス会士のような詭弁ぎべんを弄して、自己主張する。その訴える言葉が耳に届くところに足を踏み入れると、内なる欲望がその言葉に聞き入る。無生物と呼ばれるものの声！（ドライサー、一九九七「上」、一八八頁）。

このようにしてキャリアは消費文化の魅惑にとらえられ、その記号的世界に捲き込まれていく。そのへんの描写なども含めて、レイチェル・ボウルビーやウォルター・マイケルズらは、資本主義の変容（消費資本主義の登場）に対応していわばボードリヤール風の世界の到来を予告した作品として『シスター・キャリア』をとらえた (Bowly, 1985: 52-65; Michaels, 1987: 31-58)。

キャリアの対極には、消費文化のメカニズムに批判的な青年、エイムズも登場する。エイムズは、ニューヨークでキャリアが住んだアパートの隣人、ヴァンス夫人のいとこであるが、ヴァンス夫人がキャリアにとつてファッショナブルな着こなしや身ごなしの指南役であるのに対し、むしろ消費文化への批判者としての役割を演じる。ヴァンス夫妻から食事と観劇を誘われたとき、キャリアははじめてこの青年に会う。四人いっしょに高級レストランで食事をしながらエイムズは、豪華な食事に大金を費やす人たちを批判して、「あの連中の払う金額と言ったら、こんなものの本当の値打ちをはるかに超えていますよ。見せびらかしているんです」といい、またそういう浪費は「人間の幸福」とは関係がないといってキャリアを驚かせる（ドライサー、一九九七「下」、一二九―三四頁）。

エイムズは、ここで「誇示的消費」(conspicuous consumption)を批判しているわけだが、このエイムズの発言に対してヴァンス夫人は「持っているのなら、使って悪いということはないと思うわ」といい、ヴァンス氏は「だれの害にもならないさ」という。「誇示的消費」という概念を有名にしたソースタイン・ヴェブレンの『有閑階級の理論』は『シスター・キャリア』の前年、一八九九年に出版されて全米でベストセラーとなり、パーティなどで「ヴェブレン

「風」に語ることが流行ったというから（宇沢、二〇〇〇、五八頁）、この場面も、そういう状況を踏まえて描かれているのかもしれない。

エイムズの「ヴェブレン風」言説だけでなく、もっと実質的、現実的な問題も扱われている。ドライサーは、一方で消費文化の魅惑と活力を生き生きと描き出しながら、他方では消費文化のいわば影の部分もしっかりと目を向けている。たとえば、シカゴへ出てきて仕事を探して歩きまわるキャリーの姿、やっとみつけた靴工場でのつらい労働、ニューヨークでしだいに落ちぶれていくハーストウッドをめぐる描写、前記の電車のストライキに関する部分などがそうである。ストライキが始まると、運転者を求める会社側の新聞広告にハーストウッドも応募し、一日だけの練習で、二人の警官にガードされて電車を運転するが、途中、スト破りに怒った労働者たちに囲まれ、ほうほうの体で逃げ帰る。ここには消費文化の華やかさなどみじんもなく、登場するのは消費文化の「外側」の存在、「消費をめぐるゲーム」のなかに参入しえない「人びとばかりである（小林、一九九九、一五四―一五六頁）。

さらに、慈善事業に頼ってようやく食いつないでいる都市の貧窮者たちの姿も描かれている。ハーストウッドも最後には、「慈悲の聖母修道女会」の救貧院が支給する昼食の列に並ぶことになる。ここでは、援助を求める者には誰にでも、毎日正午に無料の食事が提供される。

こういうことを特別に調べに出かけてきたのでなければ、何日間も通い詰め、昼食時に六番街と十五丁目との交差点の角に立ってみても、気づかぬままに過ごしてしまうだろうが、実際は、この賑わいを見せる大道にあふれ返る膨大な群集のなかから、人間の名残をとどめた者が、時もおかずにつきつきとあらわれる。雨風にさらされ、重い足を引きずり、やつれた顔つきの、服装といっても見る影もない姿。……この救貧院は広さが限られ、調理室もない。そのためやむをえず、一度に二十五人から三十人までぐらいしか入れず、どうしても戸外に、屋内に入る順

番待ちの列ができることになった。このため毎日哀れな光景が現出したが、何年ものあいだ繰り返されているにありふれたものとなってしまい、いまではそれを目にしても、だれも何とも感じなくなっている。並んで順番を待つ男たちは、厳寒のなか、畜牛のように辛抱強かった——入れてもらえるまで何時間も待っている(ドライサー、一九九七「下」、四二八頁)。

こうした影の部分のリアリスティックな描写によって、またそのストーリーの「不道德性」によって、『シスター・キャリー』は当時のいわゆる「お上品な伝統」(genteel tradition)に反する作品とみなされ、のちにはその点が高く評価されるようになるもの、はじめのうちはなかなか受け入れられなかったという。ジョージ・サンタヤナがそう名づけたこの伝統は(Santayana, 1967 [1911])、イギリスの「ヴィクトリアニズム」にアメリカ流のピューリタニズムと楽天主義が加味されたもので、当時のアメリカの中産市民階級において、したがってまた当時の出版界や文芸界においても、根強い力をもつ価値観であった。この伝統に沿った小説では、田舎から都会に出てきた若い娘は、いろいろ苦労はしても、結局は愛してくれる人を見つければ、彼と結婚することによって幸福になる。若い娘の純潔や結婚の価値を強調する「お上品な伝統」から見れば、キャリーが二度も男と同棲し、しかもその道徳的な報いを受けることもなく成功していくという物語は、まったく受け入れがたい「不道德」なものであった。しかし、アメリカ社会の現実にはやドライサーが描いた方向へと動きつつあった。その意味で、『シスター・キャリー』は当時の中産階級の価値観への「カウンター・ナラティブ」であり、また「中産階級の期待に違反する」というより、むしろその種の期待が無視されてしまうような生活様式」(Mitchell, 1998: x)の登場を予告するものであった。この小説はまた、キャリーの生き方を通してだけでなく、ハーストウッドの零落や、浮浪者を含む都市の底辺層の人びとの姿を描くことによって、いわば彼らの視点からも中流層の「お上品な伝統」を相対化している。そしてここにもまた、『シスター・キャリー』(ひいてはアメリカ

自然主義文学」と初期シカゴ学派との深いつながり、一種の照応関係をみることが出来る。

一九二〇年代のシカゴ学派都市社会学についてピーター・バーガーは、中産階級のお上品さ、まともさ、体裁のよさ——つまりは、リスペクタビリティ——を離れて社会をみる視点を確立したことがその最大の特色の一つだと述べている (Berger, 1963: 44-47)。パークに率いられたシカゴ大学の研究者たちは、ノース・シヨアに住むお上品な人びとなら「いかがわしい」と思うようなもの、つまりスラムやゲット、安ホテルやタクシー・ダンスホール、非行や犯罪、浮浪者や売春婦などを主たる研究対象とし、そのことを通して、いわばいかがわしさの側から社会をみる視点 (unrespectable perspective, unrespectable view of society) を獲得した。その結果、シカゴ学派はみずからが所属する中産市民階級の価値観やイデオロギーを多少とも相対化することができ、また修辭的イメージと実生活との混同に警戒的な姿勢や「ロータリー・クラブではえられない洞察」(non-Rotarian insights) を育てていくことができたのである。パークによれば、この脱ロータリーの洞察の達人がヴェブレンであり、有閑階級批判にせよ高等教育批判にせよ、彼の文明批評の根底にはこの洞察がある。パークが着任したときには、ヴェブレンはすでにシカゴ大学を去っていたが(一九〇六年)、パークをシカゴ大学に招いたW・I・トマスはシカゴ大学時代のヴェブレンの親しい友人の一人であった。トマスはまた、その研究のテーマやスタイルにおいて、シカゴ学派の黄金時代を準備した人物としても知られている (Paris, 1979: 13-19; Bulmer, 1984: 45-63)。このトマスも、政治的スキヤンダルにまきこまれて一九一八年にはシカゴ大学を去るが、ヴェブレン風のアンリスペクタブルな視線と批判精神は二〇年代のシカゴ学派都市社会学に受け継がれ、アメリカ社会学のよき伝統を形成していくことになった、というのがバーガーの見方である。

しかしもちろん、それはヴェブレンだけの、あるいはヴェブレン、トマス、パークたちだけの功績ではない。すでにみたように、もう少し広い文化的背景として、リスペクタブルな視線の届かない現象を顕在化させていくロール・リポーターやマックレイカーたちのジャーナリズム活動があり、またドライサーをはじめアプトン・シンクレア、カール・

サンドバーグ、シャーウッド・アンダソン、シンクレア・ルイス、ジョン・ドス・パススらを含む「お上品な伝統以後」の文学の流れ (Cowley, 1964) があったことを忘れるべきではない。初期シカゴ学派は、そうした文化的潮流を受け継ぐとともに、いわばお上品な伝統以後の社会学として、みずからこの潮流の一翼を担っていくことにもなるのである。

おわりに——科学と文学の間

パークも、またパークとともにシカゴ学派都市社会学の全盛期を担ったアーネスト・W・バージェスも、社会学が「科学」であることを強調した。それは、彼ら二人の共著として一九二一年に出版された有名な教科書が『社会学という科学への入門』(Introduction to the Science of Sociology)と題されていたことから明らかである。

「科学」性の強調は、一つにはもちろん、新興の学問である社会学のアイデンティティの主張という意味をもっているが、もう一つには、初期のアメリカ社会学に強かった人道主義的・キリスト教的な社会改良主義との結びつきを断ち切るという意味もあった(この点については、Coser, 1978が詳しい。なお、この種の改良主義は「お上品な伝統」と親和性が強い)。一八九二年に開設されたシカゴ大学の社会学部も、はじめのうちは改良主義との結びつきが強く、ジェイン・アダムズのセツルメント運動(ハルハウス)との連携などをアピールしていたが、第一次大戦を控えた世論の動向などもあってしだいに脱実践化し、「一九二二年には、……学生便覧の社会学部の位置づけにおいて、ハルハウスとシカゴ大学社会学部の結びつきをうたった部分が全面的に削除された」(高山、一九九八、一四八頁)。パークはそういう時期に赴任してくるのであるが、彼自身、ジャーナリストとしての長年の経験から、またコンゴ問題や黒人教育運動にかかわった経験から、もともと人道主義的・道徳主義的な改良運動には懐疑的であり、まず冷静に「客観的事実」を確かめるところから出発すべきだと考えていた。

シカゴ大学社会学部で長らくパークの同僚であったエルスワース・フェアリスは、パークの死に際して『アメリカ社会学評論』に寄せた追悼文のなかで、パークは一貫して社会学は「客観的科學」であるという考えに立ち、したがって「社会学を何らかのプロバガンダの道具にしよとすの試み」には常に反対した、と書いている。一般には「改革」とみなされている事柄にもしばしば断固として反対したので、「彼の立場を誤解したソーシャルワーク関係の同僚たち」から非難されることもあったが、彼の真意は「社会学者は単なるアジテーターであってはならない」というところであり、そうした過剰な政治性によって社会学の「客観的科學」としての「権威と影響力」の確立が妨げられることを彼は恐れたのである (Paris, 1944: 322-325)。

E・W・パーシエスによる追悼文も、パークが社会学の「科學」性を主張したことによつて、パークは社会学を一種の「自然科學」と考えていたと述べているが、同時に自然科學とは異なる方法、「人間の研究に適した方法を案出していくことの必要性」をも彼は強調していたと指摘している (Burgess, 1944: 478)。パークがルポルタージュなどを含む広い意味での文学の意義を学生たちに説いたのは、一つにはこのことと関係があろう。パークにとつて社会学は何よりもまず「人間性 (human nature)」についての「科學」であり、その「人間性」の理解に欠かせないものが文学であった。逆に、数量的・統計的方法には彼はなじめなかつたようである。パークにとつてそれは「人間の研究に適した方法」ではなかつた。

しかし一九二〇年代になると、社会学における「計量化」の進展がみられ、それによつて「科學」としての社会学を基礎づけようとする考え方も強くなる。シカゴ大学においても、とくに一九二七年にウィリアム・F・オグバーンが着任し、サミュエル・ストウファールのような優秀な院生が育つてくると、そうした傾向が優勢になり、これに与しないパークはしだいに少数派となつていく。一方、早くから統計的手法に関心を示していたパーシエスは、計量化の意義を認め、みずからこの種の手法を学ぶべく、一九二八年にはオグバーンの統計学のコースに出席した (初期シカゴ学派に

おける計量的方法の発展については、Paris, 1979: 113-119; Bulmer, 1984: 151-189; 金子、二〇〇一、一九九—二〇八頁、など)。

パージエスはパークに協力してともに初期シカゴ学派の全盛期を支えたが、世代の違いもあり、その学問観などにおいても、いくぶん異なる面があった。この点に関連して、モリス・ジャンヴィッツは、社会学の役割や社会的貢献についての「工学モデル (engineering model)」と「啓発モデル (enlightenment model)」という観点から、二人の考え方の違いにふれている (Janowitz, 1972: 105-135)。「工学モデル」は、基礎 (あるいは純粹) 社会学に対する応用社会学 (applied sociology) の確立と拡張によって、具体的な政策課題に「明確な解答」ないし「処方箋」を提供しうる社会学の専門職を養成しようという考え方を基本とする。一方「啓発モデル」は、基礎と応用という区別の相対性を説き、具体的な政策課題に関しても、客観的に「正しい」解答や処方方を与えることはおそらく不可能であり、むしろあまり気づかれていない問題の所在を明らかにしたり、いくつかの可能な選択肢を示したりすることが社会調査 (ひいては社会学) の役割であるとする。そして、ジャンヴィッツによると、パークが「啓発モデル」に立っていたのに対し、パージエスは明らかに「工学モデル」に傾いていた。もちろん、「工学モデル」が必然的に計量的方法に結びつくというわけではない。計量的方法に立脚しながら「工学モデル」にコミットしない人びともあった。しかし概していえば、計量的方法の急速な発展が多かれ少なかれ「工学モデル」に力を与え、さらには社会学を一種の「政策科学」として位置づけようとする (あるいは正当化しようとする) 傾向を後押ししたことは否定できない。

パークは、しかし、一貫して「啓発モデル」の立場を維持し、また「計量化」の進展に対しても、その限界を指摘するスタンスを崩さなかった。パークの考えでは、人間性や人間の行為はしばしばあまりに複雑なので、計量的方法によってとはとらえきれない面があり、むしろ広い意味での文学から社会学者は有益な示唆を得ることができるのだ。

もちろん、パークは単に計量化の流れから取り残されたにすぎない、ということもできる。だが、理由はどうあれ、

パークの姿勢や発言が、スタンフォード・ライマンのいう「アメリカ的な計量実証主義」に対する——さらには「工学モデル」や社会学の「政策科学」化に対する——「健全な懐疑」(Lyman, 1998: 22)として、またいわばヴェブレン風の批判社会学的要素を含む「啓発モデル」の擁護として、一定の意味をもったことはたしかである。

社会学の「科学」性を主張しながら、他方では「文学」からの示唆を大切にするというパークの姿勢は、ヴォルフ・レベニースの「三つの文化」という議論に関連づけて考えることもできるであろう。レベニースによれば (Lepenes, 1988)、「社会学はもともと「文学」と「科学」との中間の営みとして発生し発展してきた。その意味で社会学は、C・P・スノーの「二つの文化」論からいうと、「第三の文化」に属するのである。そのため社会学は、たとえば十九世紀中葉以降の産業社会の把握において文学とライバル関係に立つことになる」と自然科学モデルへの接近を図ったり、逆に「科学主義」の限界を意識して文学に助けを求めたりと、「科学」と「文学」との間を絶えず揺れ動いてきた。そうした「揺れ」の諸相とそれがもたらした種々の影響や帰結を、レベニースは、フランス、イギリス、ドイツの社会学について歴史的に検討したが、アメリカ社会学についてはふれていない。その意味でも、レベニース流の観点から初期シカゴ学派社会学に照明を当ててみることは、今後の興味深い検討課題の一つであるといえよう。

引用・参照文献

- Berger, P. L., 1963, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*, Anchor Books, Doubleday. (一九七九、水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』思索社)。
- Bowdly, R., 1985, *Just Looking: Consumer Culture in Dreiser, Gissing and Zola*, Methuen. (一九八九、高山宏訳『ふとこ見をたけ』ありな書房)。
- Bulmer, M., 1984, *The Chicago School of Sociology: Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*, University of Chicago Press.

- Burgess, E. W., 1944, "In Memoriam: Robert E. Park, 1864-1944," *American Journal of Sociology*, 49-5.
- Coser, L. A., 1978, "American Trends," in T. Bottomore and R. Nisbet eds., *A History of Sociological Analysis*, Basic Books. (一九八二' 磯部卓三訳『アメリカ社会学の形成』マナモリ出版会)。
- Cowley, M., ed, 1964 [1937], *After the Gentle Tradition: American Writers 1910-1930*, Southern Illinois University Press.
- Davies, W. H., 1964 [1908], *The Autobiography of a Super-Tyran*, Jonathan Cape. (一九五六' 菊池重三郎訳『浮浪者の静かな物語』新潮社)。
- Dreiser, Th., 1900, *Sister Carrie*, Doubleday, Page & Co. (一九九七' 村山淳彦訳『シスター・キャリー』上・下] 岩波文庫)。
- Paris, E., 1944, "Obituary: Robert E. Park, 1864-1944," *American Sociological Review*, 9-3.
- Paris, R. E. L., 1979 [1967], *Chicago Sociology, 1920-1932*, Midway Reprint, University of Chicago Press. (一九九〇' 奥田道大・広田康生訳『シカゴ・シカゴロジー 1920-1932』ハーツスト社)。
- Feled, F., 1964, *No Pie in the Sky: The Hobo As American Cultural Hero in the Works of Jack London, John Dos Passos, and Jack Kerouac*, Citadel Press.
- Geltant, B. H., 1954, *The American City Novel*, University of Oklahoma Press. (一九七九' 岩元巖訳『アメリカの都市小説』研究社出版)。
- 宝月誠・中野正大編 一九九七『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣。
- Janowitz, M., 1972, "Professionalization of Sociology," *American Journal of Sociology*, 78-1.
- 金子雅彦 二〇〇一『ストゥットマールの実験的研究—一九三〇年前後のシカゴ大学における量的調査法—』シカゴ学派の総合的研究』科学研究費補助金研究成果報告書『研究代表者・中野正大』。
- 小林一博 一九九九『じつとく厳しい現実が嫌でも彼の眼をまました—シスター・キャリー—における「消費」の世界とそれを打ち破るもの—』大浦暁生監修 中央大学、トライサー研究会編『シスター・キャリー』の現在』中央大学出版部。
- Lepenies, W., 1985, *Die Drei Kulturen: Soziologie zwischen Literatur und Wissenschaft*, Carl Hanser Verlag. (1988, *Between Literature and Science: The Rise of Sociology*, translated by R. J. Hollingdale, Cambridge University Press).
- Lindner, R., 1990, *Die Entdeckung der Stadtkultur: Soziologie aus der Erfahrung der Reportage*, Suhrkamp Verlag. (1996, *The*

- Reportage of Urban Culture : Robert Park and the Chicago School* translated by Adrian Morris, Cambridge University Press).
- Lingeman, R., 2000, "Introduction" to *Sister Carrie*, Signet Classic, Penguin Putnam Inc.
- London, J., 1926 [1907], *The Road*, Greenberg. (「大正十一年 川本三郎訳『シスター・カーリーの旅日記』(全訳題)°)
- Lyman, S. M., 1998, "The Gothic Foundation of Robert E. Park's Conception of Race and Culture," in L. Tomasi ed., *The Tradition of the Chicago School of Sociology*, Ashgate.
- Matthews, F. H., 1977, *Quest for an American Sociology : Robert E. Park and the Chicago School*, McGill-Queen's University Press.
- Michaels, W. B., 1987, *The Gold Standard and the Logic of Naturalism: American Literature at the Turn of the Century*, University of California Press.
- Mitchell, L. C., 1998, "Introduction" to *Sister Carrie*, Oxford World's Classics, Oxford University Press.
- Park, R. E., 1915, "The City : Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the City Environment," *American Journal of Sociology*, 20-5.
- Park, R. E., 1940, "News as a Form of Knowledge : A Chapter in the Sociology of Knowledge," *American Journal of Sociology*, 45-5. (一九八六、町村敬志訳「知識の一形式としてのパーク」町村敬志・好井裕明編訳『実験室としての都市—パーク社会学論文選—』御茶の水書房)。
- Park, R. E. & E. W. Burgess, 1984 [1925], *The City*, Midway Reprint, University of Chicago Press.
- Rauschenbush, W., 1979, *Robert E. Park : Biography of a Sociologist*, Duke University Press.
- Riis, J. A., 1997 [1890], *How the Other Half Lives*, Penguin Books.
- Santayana, G., 1967, *The Genteel Tradition*, edited by D. L. Wilson, Harvard University Press.
- Snow, C. P., 1998 [1959], *The Two Cultures*, Cambridge University Press. (「大正」松井善之助訳『二つの文化と社会革命』(全訳題)°、ナキ書房)。
- Steffens, L., 1904, *The Shame of the Cities*, McClure, Phillips & Co.
- 高山龍太郎「一九九八」カリキュラムにみる初期シカゴ学派—一九〇五年から一九三〇年まで—『京都社会学年報』六、京都大学

社会学研究室。

Tarbell, I. M., 1925 [1904], *The History of the Standard Oil Company*, 2 vols., Macmillan.

宇沢弘文、二〇〇〇、『サエブレン』岩波書店。

(筆者 いのうえ・しゅん 京都大学大学院文学研究科教授／社会学)

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

Sister Carrie and the Early Chicago School of Sociology

by

Shun INOUE

Professor of Sociology
Graduate School of Letters
Kyoto University

Robert Park, the leading figure in the Chicago school of urban sociology during its heyday in the 1920s and early 1930s, is said to have openly encouraged his students to read not only the literature of sociology, but also the works of such authors as Theodore Dreiser and Sinclair Lewis. Taking Park's advice as a cue, this paper investigates the relationship between the Chicago school of urban sociology and the naturalist movement in American literature, focussing in particular on Dreiser's *Sister Carrie*. Rolf Lindner has already shown how, in its choice of research subjects and techniques, the Chicago school of urban sociology was greatly influenced by American journalism at the turn of the century. However, Lindner hardly mentions literature.

Dreiser's first novel, *Sister Carrie* (1900), is set in Chicago and New York at the end of the nineteenth century. It tells the story of a young girl from a rural Midwest town who finds success as an actress in the big city, while her middle-aged lover comes to ruin. The city is vividly portrayed as a place where a person's social standing rises and falls, where both the bright and dark sides of the emerging consumer culture intermingle. This take on the city is shared by the representative urban monographs of the Chicago school, such as *The Hobo*, *The Ghetto*, *The Gold Coast and the Slum*, and *The Taxi-Dance Hall*. *Sister Carrie* is also said to be a counter-narrative to the middle class values of the times (what Santayana called the "genteel tradition") which placed great importance on respectability. Here again we can see correspondences with the Chicago school, which, by investigating

the undersides of the metropolis, cultivated an “unrespectable view of society” (P. L. Berger). In this way the Chicago school of sociology was connected to literature, in the broad sense encompassing journalism, especially the literature “after the genteel tradition” of Dreiser, Lewis and others. They were part of the same cultural current.

Park emphasized that sociology was a science, but at the same time he advocated that, in regards to the understanding of human nature, sociologists should learn from literature. To conclude this paper, I propose that the Chicago school be reevaluated from the perspective of Wolf Lepenies, who situates sociology between science and literature.

Intentionality in a Historical Perspective (Part I)

by

Masashi NAKAHATA

Associate Professor of Ancient Philosophy
Graduate School of Letters
Kyoto University

Part I of this article provides a brief review of the current debate over intentionality, with an eye to show how the issues of intentionality are rooted in Franz Brentano’s philosophical psychology and his philosophical background.

In much of the recent literature on mind, the problem of intentionality is presented as a problem which must be faced by any philosopher who wants to hold that mental states are part of the natural world; Naturalist philosophers are required to explain intentionality in naturalistic terms.

It was the seminal work by R. Chisholm and W.V. Quine that led analytic philosophers to think of the problem of intentionality in this way. Chisholm introduced the concept of intentionality into the mainstream of Anglo-American philosophy. By recasting Brentano’s idea of intentional inexistence, he gave it a form that is in tune with philosophical temper of analytic philosophy; then argued against behaviorism by showing that it is not possible to give a behavioristic account of intentional states. This suggests that intentionality is an irreducible *sui generis* phenomenon. However, the irreducibility of the intentional can be taken to show, as Quine argued, the baselessness of intentional idioms. In response to this dilemma, a huge variety of approaches have been taken to explain intentionality,